opusdei.org

属人区長の書簡 (2010年8月)

オプス・デイが現在記念しているマリア年と、聖母のい行を契機にし、神の母についてエチェバリーア司教がオプス・デイに属する信者に向けて書かれた書簡。

2010/08/09

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに! 南米への旅行から帰って、この手紙 をしたためています。エクアドル、 ペルー、ブラジルで、皆さんの多く の兄弟姉妹、そして他の多くの人た ちに会って喜びを共にしましたが、 さらに聖母に捧げられた様々な場所 でも祈りました。皆さん方一人ひと りを支えにし、聖母像の前で祈って おられた聖ホセマリアの信心を思い 起こし、教会とオプス・デイのため に祈ってくださったことを聖母に感 謝し、これからも私たちに豊かな祝 福を送ってくださるよう願いまし た。そうです、マリア様に対する皆 の祈りと共にそうしました。という のも、創立者がアパレシーダの巡礼地 で言われ、サンパウロでも繰り返さ れた「深い信仰を持って祈りたい、 と聖母に申し上げた」という言葉 を、私は自分の心に刻み付けていた からです。その前に、エクアドルで は、聖ホセマリアの素晴らしい教え を思い起こしました。創立者は、標 高の影響を受けて高山病にかかり、

カテケージスの予定をほとんど実行 できませんでしたが、個人的には聖 ヨセフへの信心と霊的幼児の生活が 深まっていったのです。そして〈活 動的な無活動〉の15日間を送ったの でした。ペルーでは、数多くの想い出 が頭をよぎりました。中でも、心の 奥深くに持っておられた場面を実際 に見られたときの喜びを思い起こし ました。それは、聖母と聖ヨセフが ご聖櫃に隠れておられるイエス・キ リストを礼拝しておられる場面を表 現したものでした。何と愛情深くあ の祭壇の前にたたずまれたことで しょう。マリア年が終わるまでの 数ヶ月間に、聖母への愛を信心深く 表すことに拍車をかけましょう。

マリア年の残りの月日の間、聖母への私たちの愛情をもっと深めるように努めましょう。15日の聖母の被昇天の祭日には、ちょうどマリア年の後半を歩み始めることになります。 聖母の子供としての精神を新たに し、聖ホセマリアのマリア信心のリズムに合わせて歩むようにしまして欲していまれるとして欲している。とがあるとしたられました。の愛です」と言っておされました。別の機会にはこう論されました。「イエスがあらゆることの模範でする愛においてもそうでする母に対する愛においてもず。」[i]

オプス・デイによる女性の間での使 徒職が始まって80年がたった記念と して聖母に捧げられた年が半ばに達 した今、調子よく歩み続けるため に、これまでの日々を振り返るチャ ンスです。特に「聖母の祝日に、愛 の出し惜しみなどしないようにしま しょう。もっと頻繁に心をあげて必 要なものを聖母に願っては、母とし ての絶え間ない配慮に感謝し、愛す る人々のために祈りましょう。私た ちが常に子として振舞うなら、毎日 が聖母への愛を示すよい機会となる

はずです。本当に愛し合う人にとって毎日が愛する機会であるように。」[ii]

15日の祭日は、創立者のこの勧めを 丁寧に実行するよう私たちを招いて います。受肉されたみことばの御母 となるために神が永遠からなされた この偉大な選びは、マリアが体と霊 魂共々天の栄光を受けられた時に完 遂しました。汚れなき御宿りで始 まった物語を締めくくるマリアの被 昇天は、ゆっくりと落ち着いて私た ちの御母に注目し、聖母が天の住ま いに至るまでこの世の日々をどのよ うに過ごされたかを徹底的に掘り下 げて考えるよう、私たちを生き生き と促します。

この祭日のミサの福音書で、教会は聖母のエリサベト訪問の場面を思い出させます。教会の多くの教父や著述家たちは、常にこのエピソードを、主のお示しになったことにすぐに喜

んで従われたと定義される聖マリアの全生涯を端的に示すものとして言及しました。お告げの時に発せられたfiat(なれかし)から、十字架のもとにおける沈黙のfiat(なれかし)に至るまで、マリアの全生涯は、神の愛すべきみ旨への無傷で完璧な忠実であると要約されます。

マリアについて最も多くを語っている福音史家聖ルカが、聖母のエリサベト訪問を詳細に伝えています。際日、ロザリオの神秘を黙想する際に眺めているがゆえに、福音書の他の多くの場面と同じように、私たちにとって馴染み深い場面です。今しまう。

「そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その

胎内の子がおどった。エリサベト言とった、声高らかに満たされて、声高らかにされての中で祝福福福なたは女子さまも祝います。 胎内のお子さまりではながないます。 私の主のおとはがするとはがするとはがするとは必ずないました。 まずを私がないました。 まずでは、ときないでしました。 まずでは、なんと幸いでしました。 した方は、なんと幸いでしょう。 [iii]

エリサベトのこの言葉に対して、マリアも聖霊に満たされて、感謝と言い知れぬ喜びの賛歌Magnificat(マグニフィカト)でお答えになりました。ここで、その素晴らしい内容を全て取り上げることは出来ません。ただ、聖ホセマリアが深い信心をこめて黙想したひとつの部分を取り上げたいと思います。

聖ガブリエルはマリアに、神の全能 の表れとして、エリサベトが子ども を宿していることを告げました。彼 女を訪ねるように頼んだわけではな く、それをほのめかしさえもしな かったのです。しかし、聖母は、従姉 には助けが必要だと考え、そこにも 神のみ旨を見出します。すぐに、老 齢の従姉の住む山里を目指しまし た。聖ルカが適切にも、cum festinatione 急いで、と強調してい ることが注目に値します。聖アンブ ロジオが「聖霊の恩恵は遅れること を容赦しない | [iv]と説明したよう に、そのわけは明白です。教皇ベネ ディクト16世は、この教会博士の 考えに従って、こうコメントしてお られます。「福音史家はこう言っ て、マリアの召し出しへの応え方を 強調したかったのです。彼女におい てみことばの受肉を実現された神の 霊に素直なマリアにとって、召し出 しに従うことは、新たな小道を探求 することであり、神の導きだけを頼

りに、すぐさま自分の家以外で歩み を始めたのです。」[v]

福音書は、聖母から学ぶべき大事な ことを教えてくれます。それは、聖 母において常に見られることです。 すなわち、私たちの心に神の愛が示 されたなら、自己の安楽さにかまけ てぐずぐずすることなく、すぐさ ま、全面的に惜しみない心でこの神 的な勧めに応えるようにすべきだと いうことです。神は、お側近くで主 に従うようにと名指しで私たち皆を 呼ばれたし、今も呼んでおられま す。その神が私たちの側をお通りに なるとき、主の跡を主と共に歩むの を邪魔し得るものは、全て退けなけ ればなりません。全存在はこの〈聖 なる迅速さ〉で彩られているべきで す。このことは、教皇様が強調され るように「いつも神を優先し、人生 には神を超えて優先すべきことはな い| [vi]と知っている人に求められ ることです。

創立者の生涯の出来事を幾つか思い出します。それによって、創立者が神と聖母をますます深く愛することを速めていったように、私たちを導いてくれます。

オプス・デイの創立当初から、聖母 に対する愛情が力強く創立者の心に 燃え上がっていきました。その伝記 には、マドリードの街を行き来して いる途中で出合う聖母像にどれほど 心を込めて挨拶していたかを語って います。ある時の出来事を個人的な メモに次のように記されています。 「今朝、アトチャ通りにある聖フィ リポ修道院の高みにある聖母像に挨 拶するため、来た道を引き返し、小 さな子どものように振舞った。挨拶 するのを忘れて通り過ぎたことに気 づいたからだ。母親に愛を表すチャ ンスを逃がすなんて何という息子だ ろうか。聖母よ、決して私が子ども であることを卒業しませんよう に。| [vii]

晩年、すでに体力が弱り始めた頃、 ビラ・テベレ(本部)で御子を抱い ている聖母のレリーフの前を通りま した。ご像に接吻しようとしました が、その前のベンチに邪魔されて難し く、やっとの思いで実現しました。 後で、ご本人がされたこの努力をほ んのつまらないことだとしながら も、みことばの受肉という偉大な神 の愛の表明を前にして、神と聖母の 愛に応えるため、どのように大胆に 愛情のこもった行動をしているかを 考えるよう私たちに勧めました。皆 さんに同じことを質問します。主と その至聖なる御母が私たちに絶えず 示してくださる特別の愛情に応える ため、マリア年の残りの日々、どん な点で努力しようと決意しています か。愛にはやり過ぎはないのですか ら、聖母をもっと愛することを望ん でいますか。御子に近づけていただ こうと熱望しながら聖母を捜し求め ていますか。

ご訪問の二つ目の場面を振り返って 見ましょう。マリアは、神をたたえ てMagnificat(マグニフィカト)を 口にされましたが、その次には、お 告げを受けた時と同じように、ご自 分の卑小さを思い、神のみ前では無 に過ぎないことを表明されます。こ れは謙遜の徳の核心をなす自己認識 です。「謙遜の価値は偉大である。 聖母がザカリアの家で喜びの賛歌を うたったのは、信仰と愛と無原罪の 清らかな気高さのためではなくて、謙 遜のゆえであった。『主は私の卑し さをかえりみてくださった。そのた めに、今から後、人々は世々に、私 を幸いな者と呼ぶでしょう』。| [viii]

聖アウグスティヌスは「愛徳のしるしは謙遜である」[ix]と指摘しています。謙遜という深い穴の中に土をためてこそ、そこに誠実な愛徳を成長させることができるのです。この上もなく謙遜であられた聖母は、い

つも神が心の中で働かれることを望み、どんなものにしろ報いを自分のものにしようとされませんでした。 それゆえ、主はいつも深い愛をこめて聖母に近づき、栄光を受けるに至るまで、高みから高みへと聖母をお導きになったのです。

子どもたちよ、あらゆる状況の中で 聖母のように過ごせる振舞い方を、 この素晴らしい母から学びましょ う。最期の瞬間まで聖性の敵、特に 自己愛に対して戦わなければなりま せん。この自己愛こそは神との一致 を妨げる最大の障碍なのです。再び 聖ホセマリアに耳を傾けることにし ましょう。あるとき、内的生活のこ の点においてどのように戦ったらよ いかと尋ねた人に向かって答え、こ う強調されました。「あなたが高慢 と戦う望みを持つのはよいことで す。しかし、私は預言者ではありま せんが、あなたは恐らく人生の最期 まで高慢への傾きを持ち続けるで

しょう。ですから、謙遜にしてくだ さるよう、主にお願いしなさい。

(···) Quia respexit humilitatem ancillae suae 『この主のはしために も目を留めてくださったからで す。』(ルカ1,48)主が彼女を心に 留められたのは、主のはしための謙 遜に目を留められたからです。です から、あなたは主に仕えるように、 また謙遜においては聖母に倣うよう に努めなさい。福音書において聖母 の姿を見ることができるのは、御子 が大成功を収めておられるときでは なく、十字架の下です。しかし、主の 最初の奇跡の際には聖母は姿を現さ れます。主が奇跡を行われたのは、 聖母に頼まれたからでした。主に、 あなたが謙遜になり、私が謙遜にな るという奇跡を願いなさい。| [x]

聖マリアの数々の偉大な特典を黙想すると、心底、驚嘆します。私たちの天の母のなんという素晴らしさ! 太陽をまとい、月を踏み台にし、星

の冠をつけられた、黙示録の場面を 思い出します[xi]。しかし、「私た ちは知っています。これら全ての特 典は、マリアを私たちから遠い存在 とするのではなく、むしろ反対に、 マリアを私たちに近づけます。| [xii] 事実、天国から私たち一人ひと りを、あたかもたった独りの娘や息 子であるかのように、片時も目を離 さずに見守り続けておられます。そ れは、私たちを、いつか御子との一 致のうちに、全ての天使や聖人と共 に、永遠の至福に与らせるためで す。

さらに8月15日、甘美にして汚れなき聖母の御心へのオプス・デイの奉献を更新する際に、再びそれを思い起こします。この日は、この世にいる私たちだけではなく神に召された人も含めて、属人区の全信者の意向の交わりを強めるようにしましょう。特に、1951年、ロレトで行われた創立者の奉献に心を合わせ、そし

てまたこのマリア年に皆を代表して 私も個人的にする更新に一致してく ださい。私たちの夢やプロジェクト を聖母のご保護に委ねましょう。聖 トマス・アクィナスがマリアについ て適切にも、totius Trinitatis nobilis triclinium[xiii] 三位一体が安らう場 所、と言っています。また、教皇様 も最近の謁見で明白にこう述べられ ました。「受肉によって、三位の神 は、他の被造物のうちでただ聖母に のみ宿り、恩恵に満たされたその魂 のうちに生きることを喜び楽しんだ からです。聖母の執り成しによって 私たちはあらゆる助けを得ることが 出来ます。| [xiv]

今月の22日、天の元后聖マリアの祝日と、その翌日にこの点を繰り返すことになります。23日は、特別な助けを必要としていた創立者が、adeamus cum fiducia ad thronum gloriae, ut misericordiam consequamur! (信仰をもって栄光

の座に近づこう、慈しみに与ることができるように)という〈甘い蜂蜜〉のような神の諭しを受けた記念日です。

教皇様ご自身のため、ここしばらく はそのご休息のため、またそのご意 向と人々の善のために考えておられ る全てのプロジェクトのために、よ り熱心な祈りを捧げましょう。

そして、これら全てのことと共に、 私の意向のためにも祈ってくださ い。

心からの愛情を込めて祝福を送ります。

皆さんのパドレ

†ハビエル

パンプローナ、2010年8月1日

[i] 聖ホセマリア、1974年4月12日、 家族の集まりでのメモ [ii] 聖ホセマリア、『神の朋友』291

[iii] ルカ 1, 39-45.

[iv] 聖アンブロジオ、『聖路加福音書の解説』II,19 (PL 15, 1560)

[v] ベネディクト16世、2009年8月 15日聖母の被昇天の祭日の説教

[vi] 同上

[vii] 聖ホセマリア、『内的覚え書き』446(1931年12月3日))『オプス・デイの創立者』(未邦訳)第一巻341ページ参照

[viii] 聖ホセマリア、『道』598

<u>[ix]</u> 聖アウグスティヌス、『聖なる 童貞性』51

[x] 聖ホセマリア、1972年10月21 日、家族の集まりでのメモ

[xi] 黙示録 12,1参照

[xii] ベネディクト16世、2008年1月2 日、一般謁見の講話

[xiii] 聖トマス・アクィナス、『天使 祝詞の解説』第一章

[xiv] ベネディクト16世、2010年6月 13日、一般謁見の講話

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2010nian-8yue/ (2025/12/13)